

---

## ●ルール●

蓮美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

●ルール●

### 【Nコード】

N6962B

### 【作者名】

蓮美

### 【あらすじ】

誰かを傷つけても私はあなたを愛し続ける。

## 第1話（前書き）

長い連載にはならない予定です。楽しんで頂けたら嬉しいです！

## 第1話

人を愛すのにルールなんて必要ですか？

「まりえー！起きてよ早く行こう。」

部屋に入ってきたのは私の双子の妹。  
まりな。

そして私が姉のまりえ。

私達本当似てるんだ。

小さい頃から親にでもいつも間違えられてたし。

顔は似てても中身のできは違うけど。

妹の方が頭良くて、スポーツが出来る。

昔からよく比べられて

「まりえの方がお姉ちゃんなのに。」って言われ続けてた。

わかってるよ。

私がしっかりしていつでもまりなを見てるから。

そう昔から思っていた。

何で顔そっくりなのに中身がこんなに違うのか。

「早くー！学校遅れちゃうって！」

「「わかったってば。」」

まりえは渋々起き上がり用意を始めた。  
まりなは本当早起きだし、しっかり者。

「まりえー起きるの遅い！少しまりなを見習いなさいよ。」

ご飯を急いで食べるまりえに母が愚痴をこぼす。

「「はいはい。」」

こんなのいつも通りで慣れっこになっていた。  
いちいち気にしてらんないよ。

ご飯を食べ、多少化粧をしてからまりなを追い掛ける様に家を飛び出した。

「「待ってよー。」」

息を切らしながらまりなに着いて行く。

「待ってたら私まで遅刻しちゃうもん。」

ぷくつと口を膨らまし、まりえを見た。

風が吹くとサラサラとなびく綺麗な黒髪。  
猫目だけどパツチリとした綺麗な目。

朝寝坊なんかした事ない。毎日しっかり用意されている。

そして制服からスラリと伸びる手足。  
可愛い笑顔。

双子だとわかっていてもついつい見入ってしまう。

私も周りから見たらこんなのかな？

でも髪に寝癖が多少残っているまりえは、手で髪を直しながら学校へ向かう。

『おはよー。』

後ろから声をかけてきたのは幼なじみの雄太。

昔から仲が良く、2つ上の先輩とは思えない位。  
二人にとっては頼れるお兄ちゃん的存在だった。

『まりえー、今日も寝癖ついてるって。』

頭をポンツと撫でられる。

――ドクンツ――

「「わかってるし。てか触るなよー!」」

まりえは雄太の手を振り払い、寝癖をまた気にした。

「まりえはそうゆうのあんまり気にしないからね。」

『まりなどは大違いだ。まりえは男みたいだもんな本当に!』

ケラケラと雄太は笑う。

「「わっ私は男になりたかったんだもん。」」

意地をはったように口を尖らせた。

『まりえが男で俺が女なら絶対まりえに惚れてるわ!』

私そんなに男らしいのかなあ？

自分じゃわかんないけど。まあいいけどさ。

「まりえはまりえだし、それでいいと思うよ。そおゆう人が好きだって人居るしね☆」

まりなはクスツと笑いながらそう言った。

「「そうだね…。」」

私は周りにどう思われたっていいんだよ。でも好きな人には私のままでいいって想われたいだけ。

## 第2話

雄太は背も高く、顔もかっこいい。

遠くからでもすぐ姿を見つけられるんだ。

学校では皆の憧れの存在なのは私も知ってる。

「雄太今日も元気だね。」

まりなの雄太を見る目がいつの間にか変わっていたのもまりえは気づいていた。

「うん。」

3人は兄弟みたいに育ってきたけど。

さすがに高校生にもなると恋愛感情が現れてしまう。大人になってきたって証拠なのかな？昔は一緒に居て楽しいだけで良かったのが、だんだん自分のものだけにしたいと独占欲が出てくる。

でもまりなに雄太が好き？なんて聞く勇氣なんてないけど。

『まりえー。』

ある日雄太が私が一人の時に話しかけてきた。

『ちょっと今日話しあるからさ。帰り一緒に帰らない？』

いつもと明らかに態度が違う。



「えっ…?」

『二人だけでね。』

「うっうん。」

顔を赤くする雄太に何故かまりえも顔が赤くなる。

「まりえ。帰ろー。」

まりながいつも通り帰りになると教室まで迎えに来た。

「「ごめん今日は先に帰ってて。」」

「用事?」

「「うん。雄太とちよつと話しあつて。」」

「雄太と?」

まりなは少し表情を曇らせた。

「「きつと雄太の事だしたいした話しじゃないんだろーけどさあー。」」

ハハハと作り笑いながらまりなの様子を伺う。「じゃあ先帰ってるね!」

まりなはいつも通りの可愛い笑顔に戻っていた。

「「はぁー。良かった。」」

『…。』

帰り道雄太はずっと黙りっぱなしだった。

「「あのさ…どーしたの今日は。」」

やっぱりいつもと違う雄太。

『いやー…。あの…。』

「「気持ち悪いなあ。さっさとしてよー！」」

軽く蹴りを入れる。

『だーから…。俺さー前から…。』

ゴホンと一回咳をしてまりえを見た。

「「…!!!?!」」

『好きだったんだよ気づいてたかもしれないけど。』

「「へっ?」」

『まりなこと。』

——ドクン——

まりな…？

『ほらずつと3人で仲良くしてたけど。俺もうそろそろ限界かなー  
って。』

「「…。」」

『まりなに告ろうと思ってるんだ。』

何でまりなの？

「「何でいちいちそれを私に言うの？」」

『仲良かったから。それにまりなに好きな奴いないか聞きたくて。』

ムカついて手が震えた。

「「知らないよそんなのっ！」」

バシッと雄太の胸に鞆を当てておもいきり走った。

今日もしかしたらって思ってたまりなに気使って、傷つけない様に  
してた私が馬鹿みたいじゃん。

馬鹿らしい…。

家に着きリビングを見るとまりながソファ―に座りテレビを見てい

た。

「「チツ…。」」

### 第3話

「あれっ帰ってたの？どーしたそんな所に突っ立って。」

「「いや、何でもないよ。」」

まりえはドカッとまりなの隣に座る。

「…。あのさ…雄太の話して何だったの…？」

二人して私を挟んでなんなの？

「「本当くっだらない話だったよ。」」

フツと鼻で笑う。

「そっかあ。」

安心しましたってのバレバレだつてば。

「「でもあいつ好きな人居るみたいだよ。」」

「えっ？」

ビククリした様に目を大きくしてまりえを見た。

「「クスクス。」」

これでまりなが雄太を諦めればいい。

「誰…？」

ウルウルと目を滲ませて見るなよ。

「知らない。」

まりえは立ち上がり部屋に向かった。

イライラする。

まりなと雄太がくつつくなんて考えられない。  
付き合いさせたくない。

絶対に。

まりなと私似てるんだったら私でもいいじゃん。

何で私じゃないんだよ。

「ああむしゃくしゃする…。」

机に置いてあるまりなと二人で映ってる写真を見つめた。

「…。」

「昨日はごめんー。いきなりいなくなったりして。」

まりえは昼休みに雄太を呼び出した。

『本当だよ。鞆でいきなり叩くわ…。』

「色々あってムカついてたんだ。」

まあ雄太がまりなを好きなんて言ったからなんだけどね。

『まあいいよ。まりえのそおゆうの慣れた！で？話して何？』

「「ああ…あれからまりえに聞いたんだ。好きな人の事。」」

『まじで？』

「「好きな人居るって言ってたわ。」」

『…。』

雄太は凍りついた。

「「残念。」」

そんな雄太を見て少し心が踊った。

『あーそっかあ。ありがとねまりえ！』

「「いいえ。」」

頭をポンとまた撫でられる。

『今日は寝癖ついてないね！』

「「まあね！」」

雄太の笑顔が引き攣ってた。

これでいい。雄太がまりなを諦めてくれさえすれば。  
そして私を好きになってよ。



## 第4話

でもこんな事しても無駄だったみたい。

『まりなと付き合ったよ!』

そう雄太に聞かされたのはあれから何日も経たない頃だった。

『まりえが焦らせてくれたからさあ。告れたんだ。したらまりなも俺の事好きだって。知ってたんだろ?』

「まーね。」

『ありがとーまりえー!』

「くつつくなよー」

私は雄太の気持ちを急速にまりなに向かわせてしまったみたいで。結局恋のキューピットになってた。馬鹿げてる。

でもこれだけじゃ終わらせないよ。

すぐ二人の関係終わらせてあげるから。

学校でも二人で居る姿は目立ってしょうがなかった。なんたって校内の美男美女カップルなんだから。

嫌でも目に入る。

嫌でも噂が耳に入る。

この日からまりえは一人で帰る事が多くなった。

「「…。」」

まりえは足を止めた。

家の前でまりなと雄太が楽しそうに話している。

「「…!!」」

二人はキスをした。

——ドクンッ——

やめてよっ。

キスなんかしないでよ気持ち悪い。  
触らないでよ。

あんな姿見ても悲しくなんかない。  
ただ憎いだけ。

なんであんななの…？

「おかえり。」

「「うん。」」

いつも通りソファーに座り溜息をつきぐったりした。まりなは台所に行き何か飲み物を準備してくれてるみたいだ。

「あのさ…私雄太と付き合う事になったの。」

知ってるってば。

そんな話しないですよ。

「雄太がまりえのおかげだって…。」

「「…。」」

「ありがとう…。」

「「お礼なんかしないでよっ！気持ち悪い！」」

イラつきが頂点に達しテーブルをおもいつき蹴飛ばす。

——ガシャン——

まりなはビックリして持っていたコップを落とした。

「まりえ…?」

目を見開いて怯える様にまりえを見ている。

「「…。」ごめん。」」

まりえは足早に部屋に入った。

私ダメだ。

まりなが幸せそうにしてるのなんて見てらんない。

お互いの口からお互いの名前が出ない位憎んで別れてほしい。

そして私だけを見てほしいよ。

## 第6話

あれから朝はまりなに起こされなくても寝坊しなくなるし。  
嫌でも二人のラブラブ登校姿を見ながら学校に行かなくてはいい。  
い。

家に帰ればより一層綺麗になってくまりなの姿が目に入る。  
機嫌はいいわ。

携帯は鳴りっぱなしで横でずっといじってるわ。

毎日…。

毎日…。

毎日…。

いい加減にしてよ…。

まりながもっと雄太を好きになっていくのが見てるだけでもわかる。

日に日にまりえの気持ちは大きくなった。

早く別れさせなきゃ…。



——ピンポン——

『お邪魔します。』

ズカズカと家に入ってくる。

「「雄太…。」」

『まりなわー？』

周りをキョロキョロ見回す。

「「まだ帰ってきてないけど。今日委員会だと言ってたし。」」

『4時には家に居るって言ってたんだけどなあ。』

「「待ってなよ。もうすぐ帰ってくると思うし。」」

『そーだね。』

雄太はまりえの隣に座りテレビを見た。

まりえは雄太を見る。

やっぱりかっこいいな。

まりなが好きになるはずだよ。

まりなだけじゃない。こんな奴に優しくされたら誰だって…。

『何？』

視線を感じたのか雄太もまりえの方を向く。

「「…。」」

まりえはジッと雄太を見続けた。

『どーした?』

「いや何も。」

クスッと笑う。

『ビックリさせんなよ。』

ったく…と言ってまたテレビに目を向けた。

夕方…。

部屋もだんだん暗くなっていく。

『電気つけるべ!』

「「そーだね。」」

そう言って立ち上がる。

——ガタツ——

「「きゃっ…。」」

雄太の足に突っ掛かるフリをして雄太の膝に倒れ込む。

『だっ大丈夫かっ?』

雄太がまりえの肩に手を添えて心配がった。

「「うん…。」」

下からおもいきり上目使いをする。

二人は時間が止まった様に見つめ合った。

「「雄太…あの…」」

——ガチャ——

「ただいまー！」

戸が開くと同時にまりなの声がした。

雄太はその声を聞くなりまりえをすぐに突き離れた。

「雄太ー！居てくれたんだ。」

雄太を見るなりまりなは笑顔へと変わった。

「「…。」」

まりえはすぐに部屋へと向かった。

夜ご飯を食べる為に下のリビングに戻ると何故だか食卓には雄太もいた。

「「何で雄太がいんの？」」

『居ちゃ悪いか。』



ムツとして答える。

「今日泊まるんだよ！」

まりなは頬を少し赤くしていた。

——ドクンッ——

泊まる？

嘘でしょ…。

『そーゆう事！』

ニツと笑い箸を進めた。

まりえもイスに座り黙々とご飯を食べ続けた。

夜。

部屋のベッドで雑誌を読む。

隣のまりなからの部屋からはたまに楽しそうな声が聞こえてきた。  
その声を聞くとびイライラする。

寝ようと電気を消して布団に入る。

ウトウトしていた。

——ギシッ——

隣からのベッドのきしむ音で目が覚めた。

——ギシッギシッ——

ベッドが揺れきしむなんてSexをしてる時位だ。

聞きたくないのに耳に神経がいつてしまう。  
勝手に音が入ってきた。

やだ…。

やだやだ…。

そう思う反面まりえは二人のSex姿を想像してしまっていた。

どうやって愛し合うんだろう…。

どう相手を感じているんだろう…。

考えてるうちに体の中が熱くなっていく。

このままだと変になりそー。

まりえは起き上がり部屋を出て、戸を閉める時二人に聞こえる様におもいつきり閉めた。

台所に行き、水をコップに入れ一気に飲み干す。

「「はあ…。」」

冷たい水が熱くなった体を冷やした。

ゆっくり時間を潰し部屋に戻るとベットのきしむ音は聞こえなくなっていた。

それでもこの日まりえはなかなか眠りにつけなかった。

## 第6話

——ガチャ——

『おっはよー!』

朝勢いよくまりえの部屋に入ってくる雄太。

『まだ寝てんの?』

布団に包まっているまりえをツンツンとつつく。

「「なっ何いきなり…。」」

ビックリして布団から飛び上がる。

『まりえのパジャマ姿かあ…それもいいね☆』

「「…。」」

『まりなまだ寝てるんだもん。』

「「知らないよそんなの。」」

『まりえなんか最近冷たくない?』

雄太はまりえの顔を覗き込む。

「「二人が付き合ってたから当たり前じゃん。」」

『…?』

「私だって好きなんだから…。」

『へっ?』

ビックリしてそれ以上は何も喋らなかった。

「眠い…。」

目をこすりながらまたベットに潜り込んだ。  
雄太はちよつとしてから立ち上がる。

「…。」

二人が付き合ってまだ一ヶ月も経ってない。  
早くすれば早くするほどまりなの傷も浅くなるし。

「ねえ…。」

『何?』

ドアの取っ手を握りながらこっちを向く。  
まりえは立ち上がり雄太の方に向かう。

「キスしてよ。」

顔を近付ける。

『はっ?何言ってるの?』

「「本気だよ。」」

『俺まりなと付き合ってたんだよ？』  
雄太は呆れたように笑う。

「「そんなん知ってる。」」

真剣なまりえに雄太も戸惑った。

『ダメだって。』

「「私二番目でもいい。雄太の傍に居られるなら。」」

『…。』

「「お願い…。」」

まりえは雄太の胸倉を掴み一方的にキスをした。

何も気持ちのこもってないキス。

それでもいい。

すぐに雄太は部屋から出て行った。

これでいい…。

これでうまくいく…。

昼ご飯と一緒に食べる時雄太は少し言葉が少ない。

まりなが一人で喋っている様だった。  
でも私は何も気にしないで食べた。



『付き合ってください。』

放課後に呼び出されたまりえに告白したのは雄太の友達だった。

「「あー。ごめんなさい。私好きな人いるんだ。」」

気持ちなんか少しも揺らがない。

好きなのはただ一人だけなんだから。

好きと言われないのも君じゃない。

『そっか…。』

まりえは一人で家路に着く。

「「あっ…。」」

前には雄太が一人で歩いている。

「「ゆーた！」」

『まりえ…。』

雄太は目を合わせようとはしなかった。

「「一人？」」

『うん。じゃあ…。』

家の前でまりえの顔も見ずに家に入ろうとする。

「「ちょっと…！」」

まりえはそんな雄太を引き止める。

「「冷たくなったって言ったのは雄太のくせに！」」

『そーだな。ごめん。』

「「私も雄太の家入る。」」

『はっ？』

「「入りたいの。」」

雄太は周りにまりなが居ないか確かめてから渋々まりえを家に入れる。

「「私今日雄太の友達に告白された。」」

『えっ？』

「「でも好きな人いるって断ったんだ。」」

チラッと雄太の顔を見るとすぐに雄太は視線を外した。

「「ねえ…。」」

空いてた距離を縮める。

「キスしてよ。」

『…』

雄太は下を向いたまま動かない。

「ゆーた…。」

『俺まりなの事裏切ったりできない。』

「なんで…？」

まりえは下を向き涙をこらえた。

『ごめん…』

「好きなの！ずっとずっと前から。私こうするしかできない。」

Yシャツを掴み気持ちを訴えつけた。

『っ…』

首に顔を近付け雄太の首をべろっと舐め回す。

まりなごめんね。

こうするしかないんだ。





『! !』

電話はまりなからだった。

『もしもし…。うん。わかった。』

「「なんて？」」

『まりな迎えに行く。』

雄太はその場を立ち上がり用意をした。  
まりえも黙って用意をして二人は家を出る。

「「雄太ごめんね。」」

『えっ?』

「「好きだからなんだ。わかって。」」

雄太は何も言わないで歩いて行った。

こうするしか私は考えられない。  
いいの。

私の好きな人が手に入る為なら。

いいの…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6962b/>

---

●ルール●

2010年10月10日05時17分発行